

【優秀賞】

「これからの北方領土」

根室市立歯舞小中学校

3年 中村 そら

私の住んでいる所からは北方領土が見えます。こんなにも近くにあって、日本固有の島なのに、行ったこともなければ、どんな所かも知りません。なぜなら、今から七十四年前にロシアに不法占拠されたため、簡単には行くことができないからです。

当時北方領土に住んでいた約一万七千人の島民は、島から追い出され、今はロシア人が住んでいます。

そして、私の曾祖母も元島民の一人です。

私が小学生の時、その時の話を聞いてみると曾祖母は、

「小さかったからあまり覚えていないけど、命からがら船で逃げたよ。怖かった。」

と教えてくれました。私はそれを聞いて、「故郷を奪われた元島民がかわいそう。島を早く返してくればいいのに」程度にしか考えていませんでした。

しかし、学校での北方領土学習の一つとしてのビザなし交流で、北方領土に住んでいるロシア人の子供たちに会い、あることに気付きました。それは、彼らにとっても、今は北方領土が故郷になっているということです。北方領土が返還されることを、今の島民を追い出し、日本の領土にする、というふうに考えることは、本当の問題解決とは言えないと、その時思いました。

私には、両国が納得し、平和に繋がる解決策はわかりません。しかし、まず、現在制限されている行き来を自由にすることはできると思うのです。行き来の問題が解決すれば、漁業問題などの色々な問題にも進展があると思います。

ここで忘れてはならないのは、お互いの立場になって考えることです。私はこのことを、学校でのビザなし交流などを通して気付くことができました。両国が納得できる最善の策を見つけるためには、私たち国民が北方領土問題と向き合っていかなければならないのです。「自分には関係ない」という考えの人にも、これから生まれてくる世代にも、語り継いでいくのは私たちの役目です。

北方領土を「日本とロシアの不仲の象徴」ではなく「日本とロシアの友好の象徴」とすることができるといいように。そして曾祖母の故郷、水晶島に、曾祖母と共に訪れる日が早く来ますように。